

## 2 悩み

教員生活20年。時間と情熱の大半を生徒に傾けてきたら、家族との時間が犠牲になり、わが子が不登校になるかも…。

### あけっぴろげなコミュニケーションを！

教師は人間相手で、非常に時間も情熱も傾ける必要がある職業です。そのため、家族に向かうエネルギーが残っていないと悩む先生は少なくありません。しかしお子さんの不安定な様子に気づいているのはチャンスです。お子さんの問題をキッカケにご夫婦でカウンセリングを勉強し、夫婦関係が改善できた先生もいらっしゃいます。保護者としても教師としても成長できる貴重な機会だと、前向きにとらえてください。

ある優秀な先生と話していてお互いに驚いたのですが、お子さんが

家のリビングに出入りする際「失礼します」と挨拶をしていて、それが不自然だとは先生自身は気づかなかったというんです。そもそも家庭のリビングは、家族の息抜きの場なのに、お子さんにとっては学校の職員室の延長のようになつたわけです。そこまで極端ではな



かつたとしても、高校の教員の場合、あえて保護者や生徒との間に一線を画す態度をとっている先生がいらっしゃって、その態度が日常化し、家庭に対しても垣根を作りがち。家庭のなかでは、あけっぴろげな「コミュニケーションが大切です。」でも、急に教員としての仮面を脱ぎ捨てるのは難しいかもしれません。そんな場合は、まず日ごろの授業改革から着手してみてください。授業のなかで生徒との垣根を取り払う努力をしていくことで、日常の態度も少しづつ変化させていけると思います。

もうとみ・よしひこ●明治大学文学部教授、臨床心理士、教育学博士。1963年福岡県生まれ。筑波大学人間学類・同大学院博士課程修了。千葉大学教育学部助教授を経て現職。全国の悩める教師のためのセルフヘルピングやネットワーキングを支援する“教師を支える会”代表。時代の精神(ニヒリズム)と闘うカウンセラー。「偶然をチャンスに変える生き方 最新キャリア心理学に学ぶ」、「「7つの力」を育てるキャリア教育」など著書多数。